2021年3月21日　久宝教会　受難節第5主日礼拝

メッセージ「私たちの望むものは」　　水谷憲牧師

聖書　マタイによる福音書　20章20－28節

昨日、とうとうあの話題の「劇場版鬼滅の刃　無限列車編」を、息子と息子の友だち2人を連れて観てきました。今更な感じもしますが、緊急事態宣言も解除されたし、映画が公開され始めてからもう半年近くたつので、ゆったりと観れるんじゃなかろうかと思ったわけです。実際、前日に予約状況を確認したところ、座席がすかすかだったので余裕の姿勢でおったのですが、当日行ってみると何と、ものすごい人で、座席の8割は埋まっておりました。何とか滑り込めたものの、スクリーンの正面、前から2列目くらいしかあいておらず、画面が近すぎて逆に見にくかったのが残念でした。しかし、それにもかかわらず、さすが日本の興行収入歴代第一位の記録を塗り替え、日本アカデミー賞で最優秀アニメーション作品賞をとっただけあって、大変心揺さ振られる、印象深い映画でした。「面白かったねー」と言いながら夕方、家に帰ってきたわけですが、そうしたところ、午後6時過ぎ、宮城県で震度5強の地震が起きたというニュース。東日本大震災から10年の節目の年、先月にも大きな地震がありましたし、この3月にも、同じような場所で同じような巨大な地震。毎年のように日本の各地で様々な災害が起きていることも相まって、何だかいつもにもまして不安な気持ちになった夜でした。詳しい被害の状況などはまだよく分かっておりませんけれども、すべてのみなさんの無事を祈りたいと思います。

さて、本日の聖書の最初に登場するのは、ゼベダイの息子たち、すなわちヤコブとヨハネの母です。父親のゼベダイはというと、息子たちがガリラヤ湖畔でイエスに招かれた際に置いてけぼりを食って以来、出てきません（マタイ４：21－22)。ですが、今回は母親が出てきます。彼女はイエスが十字架で死んだ時も、それをマグダラのマリアやイエスの母マリアと共に見守っておりましたので、彼女ももしかすると、既に夫を置いて息子たちと旅を共にしていたのかもしれません。そしてイエスが自分の死と復活

を３度目に予告した際に、彼女はたまらずイエスの元に駆け寄ってきてひれ伏し、願うわけです。「私の２人の息子が、あなたの御国で、一人はあなたの右に、一人は左に座れるとおっしゃってください。」私も、人の親の端くれですから、人並みには子どものことを心配しているつもりです。特に、子どもの将来、自分たちが死んだ後も、子どもたちには幸せに生きていってもらいたいと願っています。ゼベダイの子らの母も、息子たちの師匠であるイエスが死と復活の予告をした際に、そのイエスの身に何か起こるにせよ起らぬにせよ、今のうちに師匠の口から息子たちを将来的に重要な役に用いるという言質をとっておきたかったのかもしれません。親である自分も、いつまでも息子たちを見守ってやれるわけでもないので、彼女も彼女なりに必死だったでしょう。しかし、そのゼベダイの子らの母の願いというものは、息子たちの将来に対する母親としての切実な思いがそれなりにあったでしょうから、こう言ってはちょっとかわいそうですが、まったく息子たちのためにならぬ、母親の独りよがりの願いであったと言わざるを得ないかもしれません。実際、イエスも「あなた方は、自分が何を願っているか分かっていない」とばっさり切っています。

「鬼滅の刃」の主人公の少年は、6 人兄弟の長男として、父親亡き後の母を助けながら平凡に幸せに暮らしていたのですが、ある日長女である妹を残して、鬼に家族全員が惨殺されます。そして、かろうじて生き残ったものの鬼となってしまった妹をなんとかして人間に戻し、家族を奪った鬼を滅ぼすために「鬼殺隊」という組織に入る道を選んだ主人公の物語です。平凡に暮らしていた少年がある日突然家族をみな失ってしまうという、もう立ち上がれないほどの喪失感。そんな深い傷を負いながらも、ひとり残った妹のためにも自分は生きていかなければならない。「自分も家族と一緒に死ねたらどんなによかったか」「家族の後を追えたらどんなにましか」。そんな気持ちを持ちつつも、妹を人間に戻すために自分は闘わなければならない。私たちの想像をはるかに超えるその苦しみは、例えば東日本大震災によって一日にして家族をすべて失った多くの人々、そのような境遇にある日突然放り出された方は、本当にたくさんおられることを思いますが、その方々の筆舌に尽くしがたい苦しみに重なるような気がします。3 月 11 日の朝日新聞の夕刊 11 面には、妻と息子 2 人を津波で一度に失った男性

が、1年後に自ら命を絶ってしまった悲しい出来事を振り返る、その両親である老夫婦の記事が掲載されていました。妻と息子たちをいっぺんに失った男性の苦しみ・悲しみは、私には苦しすぎて、とても想像しきれない一方で、彼が「一緒に死ねたら楽だったろう」「今からでも死んで向こうで会えるなら、どんなに幸せか」という気持ちになったのも、本当によく分かる気がします。

そして、そのような私たちにはとうてい想像しきれない苦しみを抱える主人公は、映画の中で、夢を見せる鬼に悪夢を見せられます。彼は、鬼に殺された家族から「なんで助けてくれなかったんだ」「なんであんた一人生き残ってるんだ」と恨み事を吐かれます。それは、震災で生き残ってしまった人たちが、幾度となく自問してきた問いであり、彼らが一番恐れる死者からの言葉でもあったでしょう。しかし主人公は、その悪夢に心折れるどころか、逆に奮い立つのです。「俺の家族がそんなことを言うはずがないだろう！　俺の家族を侮辱するな！」一緒にいてあげられなくて申し訳なかった。助けることができなくて、本当につらい。「本当にごめんね」。どれだけ謝っても謝りきれない。でも、だからといって愛する家族は、そんな恨みごと・呪いの言葉など、決して言うはずがないんです。キリストも、信頼し愛する弟子たちに結果的に裏切られ見捨てられても、決して彼らを恨んだり呪うことはなかったではないか。映画の中でも、死にゆく人が愛する人・信頼する人に残してゆく言葉は「弱い人を助けなさい」「胸を張って生きろ」という言葉だったことを思います。

ですから、ゼベダイの母は、残してゆく子の将来を案じるならば、息子たちにどのような地位についてほしいかではなく、むしろ息子たちにどのように生きてほしいかをイエスに相談すればよかったのではなかったでしょうか。彼女がイエスに「あなたは自分が何を願っているか分かっていない」と言われてしまったのは、彼女の願うものの方向性が、ちょっと違っていたからかもしれません。彼女の願うべきは、息子たちに関する安心・安定などではなく、残されてゆく息子たちが、「これからより良く生きてゆくために、どうかイエス様助けて下さい」といった願いであるべきだったかもしれません。そしてそれはこの母の願いに腹を立てた他の弟子たちについても同様であるように思います。彼らの怒りはどのような怒りだった

のかというと、「あいつら何を抜け駆けしているのだ」という、自分も同じ願いを抱いていたがゆえの怒りだったように思われます。だからこそイエスは言われました。「あなた方も知っているように、諸民族の支配者たちはその上に君臨し、また、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなた方の間では、そうであってはならない。あなた方の中で偉くなりたい者は、皆に仕える者となり、あなた方の中で頭になりたい者は、皆の僕になりなさい」(25－27 節)。偉いとか偉くないじゃなくて、どう生きていくかなのだ。

私たちは自分の心にもどこか、この母親や弟子たちと同じような安心・安定を求める隠れた欲求があることを認め、謙虚にこのキリストの言葉、「あなた方の間ではそうであってはならない」という言葉を受け取っていきたいものだと思います。偉くなりたい、こんなポストについて皆の上に立ちたいといった欲求、自分でも気付かなかった傲慢さを改めて認め告白することが、自分でも気付かないうちにイエスを十字架につけてしまっていたことの気付きへともつながるように思うのです。私たちの望むべきものは、将来の安心や安定なんかではなく、神の御心に示されているような命の使い方なんです。私たちの命なんて、昨日まで笑っていても次の日にはどうなっているか分からないような、本当に儚いものであることを思います。だからこそ私たちは、いつか天国の門の前で神様に「よくやった」と言って頂けるような生き方、また神様だけでなく、先に天に召されて行かれた私たちの愛する人々にも「よくがんばったね」と言ってもらえて、自分でも胸を張れるような生き方・命の使い方を、私たちはしていきたいものだと思います。